



## 酪農ブーム

「8円牛乳」も登場



3輪車時代の境野集乳所

昭和28年から29年にかけては、牛乳、バター、チーズ、乳菓、アイスクリームなど牛乳の需要が伸び、乳製品の在庫欠乏、牛乳の不足を生じ、乳業会社の牛乳争奪戦による乳価の引き上げで酪農ブームが起きました。

森永乳業が訓子府工場を設けたのが同29年、当時置戸の牛乳は北海道バター（現在の雪印乳業）一本でしたが、森永で獲得した酪農家だけでは工場の処理能力に対して集乳量が不足することから、貸付牛制度の導入等によって乳牛飼育農家が増加している置戸に森永は目をつけて、同31年1月、川南の一部より出荷にこぎつけ、続いて北光へと進出。北光では乳牛貸付を条件に森永が契約要請をしたため、ある程度まとまった出荷となりました。

この集乳合戦の結果は、北海道バター、森永乳業ともに地盤拡大のための生産者優遇競争へと走り、乳化交渉においても、出荷費補助や飼料あつせんでも競争するなど、前向きの姿勢で酪農家へ還元されていきました。

昭和30年、東京都主婦連が「10円牛乳」を提唱

して全国的话题を呼んだ頃、置戸ではなんと「8円牛乳」が出現。既存業者に決戦を挑むなど売乳合戦が華やかに繰り広げられました。

森永対道バターの集乳合戦の結果、高騰を見た牛乳も、その後休戦となって次第に下落。この低価格対策として、拓実集落では市販直営生産を計画し、エルム牛乳として8円という驚くほど安い価格で売り込みを開始しました。

しかし、あまりにも安い牛乳の価格で、品質低下を心配した北見保健所から注意があり、田岡農協組合長が調停に入って第一次会談を開きましたが結論を得ないまま物別れとなりました。

牛乳は、カルシウム、ビタミンA・B、たんぱく質など栄養的に不可欠なものを多く含み、いかに優れた食品であるかの効用が今のように浸透しておらず、エンゲル係数も高かったため、たとえ8円でも購買力は高くはありませんでした。こうしたことから安売り合戦が長引くにつれて採算割れが続き、第二次会談で話し合いがついて、間もなく日本一安い8円牛乳は姿を消したのでした。

（参照：置戸町史下巻）

# 開町100周年を迎えました

置戸町は、大正4年に野付牛村から分村して、平成27年、開町100周年を迎えました。

昭和40年に開町50周年記念事業を実施してから、10年ごとに周年記念事業を執り行ってきましたが、本年は100周年という記念すべき年になります。

これまで先人たちが築いた歴史、足跡を尊び、感謝の意を込めて記念事業を実施し、置戸町の将来に新たな希望と夢を抱き、ともに歩み、理想とするまちを創り上げていく、町民の誰もが記憶に残るような100周年になることを願っております。

昨年4月に開町100周年記念事業実行委員会を設立し、平成27年度に行う各記念事業の準備を進めています。開町100周年を町民の皆様にご覧いただけるように、次のとおり看板の架け替え等を行いました。

- ・置戸市街入口の歓迎塔のリニューアル
  - ・懸垂幕の設置（コミュニティホールぼっぼ、置戸町役場）
  - ・記念看板の設置（置戸町役場前駐車場）
  - ・タペストリーの設置（置戸市街街路灯）
  - ・おけばんばくんパペットの設置（公共施設等）
- 事業の実施につきましては、1月1日広報お